

農業粗生産額とともにも全国第2位 生産農業所得

はじめに

農林水産省経済局統計情報部発行の本報告書による、昭和60年における茨城県の農業粗生産額及び生産農業所得は、ともに全国第2位となり茨城の農業の現況を示すものとなっている。

そこで、農畜産物の産出額や粗生産額について全国及び各県についてみてみたい。

全国の農業総産出額及び生産農業所得の概要

最近の農業総産出額は、食料消費の伸び悩み、農産物価格の低迷のほか、気象災害も加わり53年以降58年までは停滞を続けてきたが、59年には史上最高の米の豊作によりかなりの伸びを示した。

60年の農業総産出額(概算)は、11兆7563億円(対前年比0.3%増)と前年並みとなった。

これは、農業総産出額の3割を占める米が前年をわずかに下回ったほか、工芸農作物も前年を下回ったものの、野菜の産出額が価格の上昇によりかなり増加したためである。

最近の生産農業所得は、50年代中期以降の気象

災害や、農産物価格の低迷等を反映し、農業総産出額が伸び悩んだこと、生産農業所得率が生産資材等の物的経費の増加などにより低下したこと等により前年を下回って推移したが、58、59年は米、野菜の増加により農業総産出額が前年を上回って推移し回復基調を示した。

しかし、60年の生産農業所得(概算)は、4兆4912億円(対前年比0.7%減)となりわずかではあるが前年を下回った。

これは、農業総産出額が前年比0.3%増とわずかな伸びにとどまったことに加え、生産農業所得率が前年をわずかに下回ったことによる。

部門別産出額の概要

1. 耕種部門

ア. 米の産出額は3兆8616億円(農業総産出額に占める割合32.8%)で、史上最高の豊作を記録した前年(3兆9300億円)に比べ1.7%減少した。

米の生産量は、作付面積が水田利用再編対策の転作等目標面積の調整等によってわずか

表一 1 農業総産出額及び生産農業所得 — 全 国 —

(単位:億円)

年	総産出額	耕 種	農 産 物					工芸農作物	養 蚕	畜 産	生産農業所得
			米	麦	野 菜	果 実					
55	102 625	69 660	30 781	1 661	19 037	6 916	4 946	1 510	30 677	45 839	
56	107 154	73 984	32 994	1 663	19 549	7 612	5 110	1 301	31 057	44 532	
57	106 725	73 460	33 059	1 953	18 752	7 523	5 390	1 380	31 095	42 579	
58	110 027	76 753	34 134	1 814	20 792	7 365	5 509	1 221	31 239	43 683	
59	117 171	83 522	39 300	2 010	19 718	9 428	5 646	971	31 926	45 223	
60	117 563	83 728	38 616	2 206	21 439	9 356	5 061	844	32 238	44 912	

昭和60年生産農業所得統計から

に増加したものの、収量が大量であった前年産には及ばなかったことから前年をわずかに下回った。

一方、生産者価格は、政府買入価格が据置きのため前年並みとなったことから、産出額はわずかに減少した。

イ. 麦類の産出額は2206億円(同1.9%)で、前年に比べ9.8%増加した。

麦の生産量は、作付面積が小麦以外の3麦で減少したことから前年をわずかに下回ったものの、作柄が北海道で天候に恵まれ被害も少なかったことから史上最高の豊作となり、45年産以降最高となった。

一方、生産者価格は、政府買入価格が据置きのため前年並みとなったことから、産出額はかなり増加した。

ウ. 野菜の産出額は2兆1439億円(同18.2%)で、前年に比べ8.7%増加した。

野菜の生産量は、作付面積がたまねぎ及びカリフラワーは増加したものの、なす、かぼちゃ、未成熟とうもろこし等は減少したため全体では前年産並みとなり、一方、作柄はさといも、たまねぎ等が気象条件に恵まれ良好であったものの、すいか、なす、ピーマン等が梅雨期の長雨や夏期の高温等の影響により悪かったことから前年産並みとなった。

一方、生産者価格は、たまねぎが品薄高だった前年に比べ大幅に下落したが、夏秋野菜及び秋冬野菜が上昇したため、産出額はかなり増加した。

エ. 果実の産出額は9356億円(同8.0%)で、前年に比べ0.8%減少した。

果実の生産量は、なつみかん、日本なし等

が減少したが、みかんは「かんきつ産地再編整備特別対策事業」等により結果樹面積は減少したものの、収量が表年であったことから、着果数が多く、43年以降最低であった前年産を大幅に上回ったほか、ネーブルオレンジ、いよかん、りんご等も増加したため前年をかなり上回った。

一方、生産者価格は、価格の高い品種の割合が高まってきている日本なし、生産量が減少したなつみかん等は上昇したものの、前年不作のため高騰していたみかん、りんご等が下落したため、産出額は前年並みとなった。

オ. 工芸農作物の産出額は5061億円(同4.3%)で、前年に比べ10.4%減少した。

工芸農作物の生産量は、こんにゃくいもが2年続きの高値から大幅に増加したほか、さとうきびも好天候に恵まれ過去最高となったものの、葉たばこが53年以降続いている計画生産により減少したため、前年産をやや下回った。

一方、生産者価格は、葉たばこ、てんさい等が前年並みとなったものの、茶(生葉)が消費の伸び悩みから下落し、こんにゃくいもも生産量の増加により前年までの高値から大幅に下落したため、産出額はかなり減少した。

2. 養蚕部門

養蚕の産出額は844億円(同0.7%)で、前年に比べ13.1%減少した。

収繭量は、全般的に気象条件に恵まれ1戸当たりの生産量は増加したが、生糸需給の不均衡による繭の計画生産や基準糸価が引き下げられたこと等から、掃き立てを中止する農家が多く前年産をかなり下回った。

また、繭価も基準価格の引き下げ等により前年産をかなり下回ったことから、産出額はかなり大きく減少した。

3. 畜産部門

畜産の産出額は3兆2238億円(同27.4%)で、前年に比べ1.0%増加した。

ア. 肉用牛の産出額は4786億円(同4.1%)で、前年に比べ14.6%増加した。

生産量は、枝肉取引頭数が年当初めす和牛を中心に高い伸びで推移し、年後半は鈍化したものの、年間を通じてみるとかなりの伸びとなった。

一方、生産者価格は、生産量が増加したものの、牛肉に対する潜在的需要が高いことからかなりの上昇となったため、産出額はかなりの増加となった。

イ. 生乳の産出額は7559億円(同6.4%)で、前年に比べ2.0%増加した。

生乳の生産量は、経産牛頭数がほぼ前年並みであったものの、優良牛の導入や駄牛とう汰の強化等により、1頭当たり搾乳量の増加からわずかに増加した。

一方、生産者価格は、加工原料乳の保証価格が前年並みとなったものの、飲用牛乳の価格が低迷したことからわずかに低下した結果、産出額はわずかな増加となった。

ウ. 豚の産出額は7601億円(同6.5%)で、前年に比べ13.8%減少した。

生産量は、生産基盤の強化に加え、飼料価格が低下したこと、前年の豚肉卸売価格が堅調に推移したこと等を反映してかなりの増加となった。

一方、生産者価格は、生産量が増加したこ

とに伴い大幅に下落したため、産出額はかなり減少した。

エ. 鶏卵の産出額は5406億円(同4.6%)で、前年に比べ10.2%増加した。

生産量は、飼料価格の低下から、年当初は前年を上回って推移したが、夏以降は計画生産が強化されわずかな伸びとなった。

一方、生産者価格は、夏以降の計画生産等を反映しかなりの上昇となったため、産出額はかなり増加した。

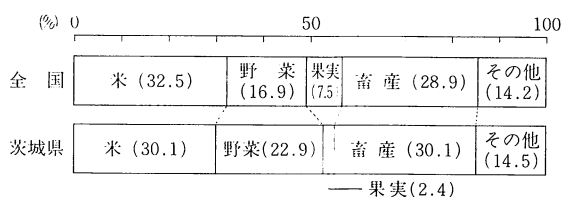
茨城県の農業粗生産額と生産農業所得

本県の農業粗生産額は5172億円で、前年に比べ2.6%減少したが、全国順位は北海道に次いで第2位である。この額は全国農業粗生産額の4.5%にあたる。

これを主要部門別構成についてみると、米の粗生産額が1559億円、畜産の粗生産額が1556億円と、ともに全体の30.1%を占めている。次いで野菜の粗生産額が1185億円で22.9%である。構成割合を全国と比較すると、野菜が全国を上回っている反面、果実の割合が全国より下回っている。

また、全国の主要部門別粗生産額に対する本県の占める割合の高い農畜産物についてみると、野菜が6.1%と千葉県に次いで第2位。雑穀・豆類が5.6%で第3位。いも類が8.3%、花きが6.0%とともに第4位。また、畜産についても4.7%で第4

図一 農業粗生産額の主要部門構成



表一 農業粗生産額 — 昭和60年 —

(単位：億円，%)

	農業粗生産額	耕種	作物							畜産	生産農業所得
			米	麦類	雑穀・豆類	いも類	野菜	果実	花き		
全国	115 544	80 493	37 446	2 203	1 267	2 572	19 566	8 715	2 289	33 434	44 912
(割合)	(100.0)	(69.7)	(32.5)	(1.9)	(1.1)	(2.2)	(16.9)	(7.5)	(2.0)	(28.9)	—
茨城県	5 172	3 524	1 559	107	71	213	1 185	124	137	1 556	2 145
(割合)	(100.0)	(68.1)	(30.1)	(2.1)	(1.4)	(4.1)	(22.9)	(2.4)	(2.6)	(30.1)	—

位であり，その中でも豚については10.0%で第1位である。

昭和60年の生産農業所得は2145億円で，前年に比べ4.1%減少したが，農業粗生産額同様全国第2位である。

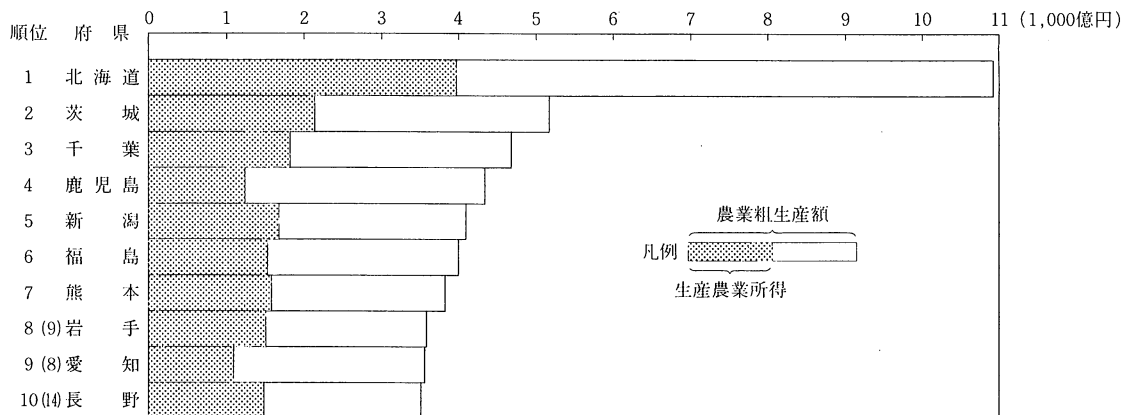
都道府県別の動向

農業粗生産額の動きを都道府県別にみると，農業粗生産額の主体をなす米の生産量が，豊作だった前年に及ばなかった都道府県が多かったこと，また，豚が，肉豚価格の低下，子豚の出荷頭数の減少から粗生産額が減少したこと等により，前年を上回ったのは18都道府県にとどまり，前年を下

回ったのは29府県に及んだ。

農業粗生産額が増加した主な都道府県をみると，和歌山がみかんを中心とした柑橘類の生産量増加により果実が増加したことから前年に比べ6.9%増と最も高い伸びを示したのをはじめ，長野が野菜のうち，葉茎菜類の価格が大幅に上昇したこと，花きも価格が上昇したことから前年に比べ5.1%増となった。次いで，高知は野菜が果菜類を中心に価格が上昇したほか，花きも生産量の増加と価格の上昇により大幅に増加したことから前年に比べ4.6%増となった。

一方，農業粗生産額が前年を下回った都府県は米の粗生産額の減少が影響しており，特に，佐賀



注：()内数値は，前年に比べ変動のあった都道府県の前年順位である。

では米のほか、麦類も生産量が豊作であった前年より減少したことから12.6%減と大きく下回った。次いで、島根でも米のほか、野菜、果実及び工芸農作物で減少したため11.0%減となった。長崎は米のほか、いも類がかんしょの生産量の減少と価格の低下により減少したため、9.6%減となった。

この結果、農業粗生産額の都道府県別順位をみると、1～7位は57年以降変化がなく北海道、茨城、千葉、鹿児島、新潟、福島、熊本という順になっており、8位には56年の19位から毎年順位を向上させてきた岩手が入っており、9位には愛知が前年の8位から後退し、10位には前年5ランク後退し14位になっていた長野が上昇した。その他目立った動きでは、宮城、大分、岐阜、三重、高知、沖縄及び神奈川が2ランク上昇し11、24、25、27、31、36、39位となった。一方、青森と佐賀は、4ランク後退し14、28位となった。

生産農業所得についてみると、物的経費は円高等の影響により生産資材価格が低下したものの、農機具費等が増加したためわずかに増加したことで、水田再編補助金が転作等目標面積の調整等により減少したため、前年を上回ったのは13都県となり農業粗生産額のそれより少なくなっている。一方、前年を下回ったのは34道府県となっている。

生産農業所得が増加した主な都道府県をみると、神奈川は所得率の比較的高い野菜が価格の上昇により前年に比べ15.2%増と最も高い伸びを示した。次いで、和歌山が所得率の比較的高い果実等で増加したため12.1%増となった。続いて、奈良が野菜及び果実の価格上昇等により対前年比11.5%増となった。

一方、島根及び佐賀では米を中心とした耕種部門が気象災害によりかなり減少したため、生産農

業所得はそれぞれ25.2%減、21.9%減と前年を大きく下回った。

この結果、生産農業所得の都道府県別順位をみると1～5位は前年と変わらず北海道、茨城、千葉、新潟、青森の順となっており、6位にはおうとうを中心とした果実で粗生産額が増加した山形が入り、以下、7位熊本、8位宮城、9位福島、10位秋田となっている。その他目立った動きでは、増加率の最も高かった神奈川が44位から38位と6ランク上昇したほか、三重が5ランク上昇し30位、沖縄及び和歌山が4ランク上昇し25、34位となった。一方、広島及び山口は5ランク後退し、35、42位となり、長崎は4ランク後退し28位となった。

全国農業地域別主要部門の全国に占める割合

1. 農業粗生産額

農業粗生産額の地域別シェアをみると、大消費地を抱え、農業生産の多角化が進んでいる関東・東山が22%を占め、次いで、米が特化している東北が18%、更に、畜産が特化している九州は17%となっている。

沖縄は、1%とわずかなシェアであるものの近年シェアを拡大してきている。

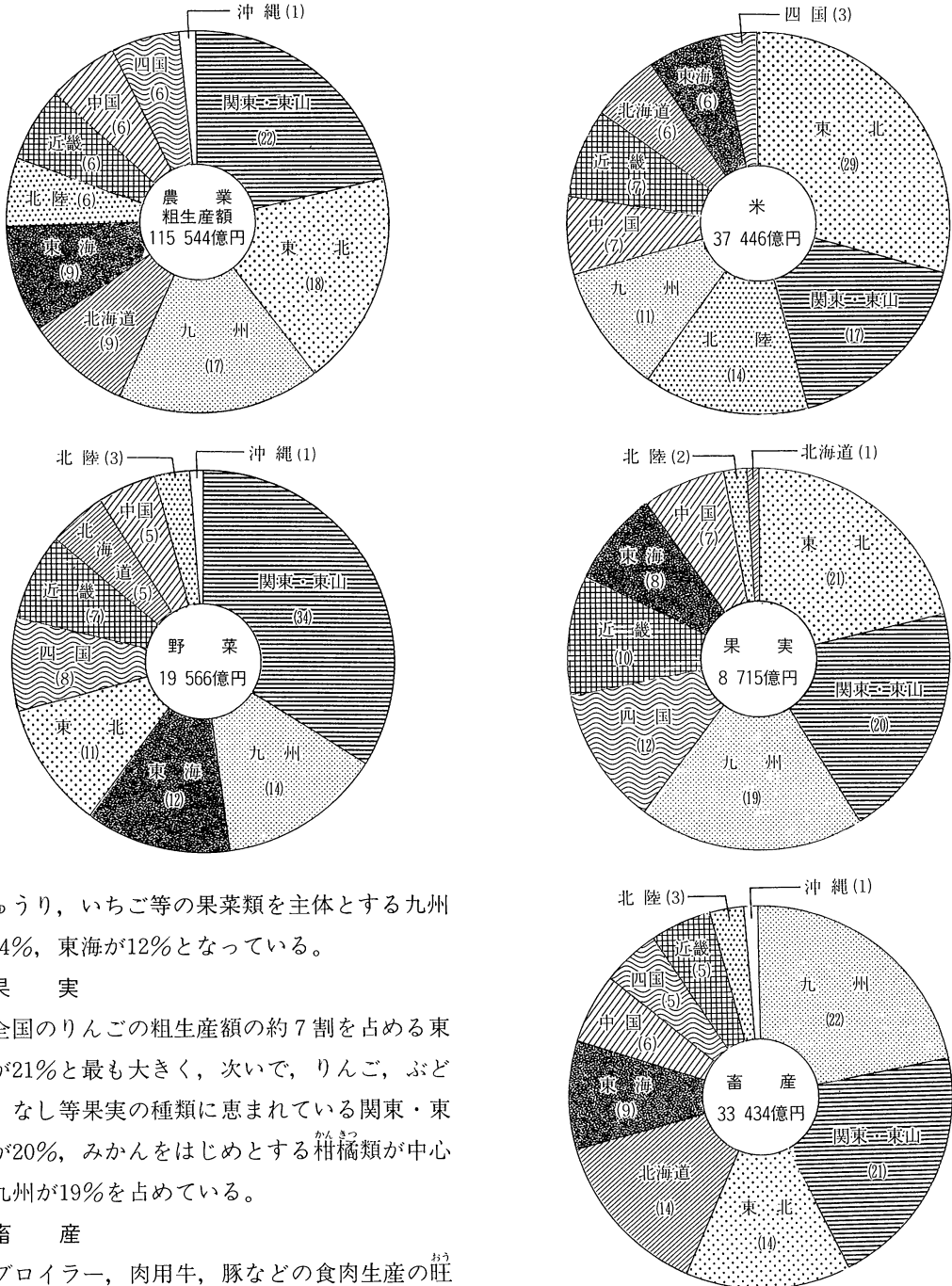
2. 米

米が農業粗生産額の5割強を占める東北は、史上最高の豊作となったこともあり29%と大きなシェアを占め、次いで、関東・東山が17%、米の割合が同7割弱を占める北陸が14%となっており、この3地域で全国の6割を占めている。

3. 野菜

大消費地を抱えきゅうり、トマト、ピーマン等の果菜類やレタス等の洋菜類を主体とする関東・東山が34%を占め、次いで、露地メロン、

図一三 全国農業地域別主要部門の全国に占める割合 (%)



きゅうり、いちご等の果菜類を主体とする九州が14%、東海が12%となっている。

4. 果 実

全国のりんごの粗生産額の約7割を占める東北が21%と最も大きく、次いで、りんご、ぶどう、なし等果実の種類に恵まれている関東・東山が20%、みかんをはじめとする柑橘類が中心の九州が19%を占めている。

5. 畜 産

ブロイラー、肉用牛、豚などの食肉生産の旺

盛な九州が22%を占め、次いで北関東を中心とした豚をはじめ、生乳、鶏卵及び肉用牛を主体とする関東・東山が21%、豚、肉用牛、生乳等の東北及び、生乳が畜産の5割強を占める北海道が14%と続いている。

主要部門別割合の各県の特徴

各県の昭和60年農業粗生産額の主要部門別割合をみると、特徴のある県がみられ、それぞれの県の農業の中心となっている農畜産物がわかる。

米の粗生産額の占める割合の高いのは、福井県が74.4%、富山県(73.9%)、新潟県(69.6%)、滋賀県(68.5%)、秋田県(68.0%)であり、次いで宮城県、山形県、石川県と5割以上の県が続く。

野菜の粗生産額の占める割合の高いのは、東京都が52.6%、高知県(49.1%)、神奈川県(37.0%)、大阪府(34.3%)、千葉県(33.3%)、埼玉県(31.7%)である。

果実の粗生産額の占める割合が高いのは、和歌山県が48.5%、山梨県(47.4%)、愛媛県(32.2%)、青森県(22.8%)、長野県(20.2%)である。

畜産については、各県とも農業粗生産額の10%以上を占めているが、宮崎県が54.0%、鹿児島県が52.0%と特に高い割合を占めている。

主要部門の全国に占める割合の高い県

全国の農業粗生産額(11兆5544億円)を主要部門別に、占める割合の高い県をみると次のようである。

米の粗生産額(3兆7446億円)について各県の割合をみると、新潟県が7.6%と最も高く、次いで北海道の6.3%である。

麦類の粗生産額(2203億円)では、北海道が35.0

%と3分の1以上を占めており、次いで福岡県(7.8%)、佐賀県(7.2%)である。

雑穀・豆類の粗生産額(1267億円)では、北海道が40.0%を占め、次いで茨城県の5.6%である。

いも類の粗生産額(2572億円)では、北海道が29.4%と最も高く、鹿児島県(11.4%)、千葉県(10.5%)とつづく。

野菜の粗生産額(1兆9566億円)では、千葉県が最も高く8.0%を占め、次いで茨城県の6.1%である。

果実の粗生産額(8715億円)では、青森県が8.9%、長野県が8.1%、和歌山県(7.4%)、愛媛県(7.3%)となり、4県で果実全体の3割以上を占める。

花きの粗生産額(2289億円)では、愛知県が14.8%を占めている。

畜産の粗生産額(3兆3434億円)では、北海道が13.6%と最も高い割合を占め、次いで鹿児島県の6.8%である。これを肉用牛、乳用牛、豚、鶏と分けてみると、肉用牛(5008億円)については鹿児島県が10.2%と最も高く、次いで北海道の8.3%である。乳用牛(9138億円)については、北海道が32.5%と他を大きくリードしている。豚(9145億円)については、茨城県が最も高い10.0%を占め、次いで鹿児島県の7.8%である。鶏(9524億円)については、鹿児島県が9.7%で最も高く、次いで宮崎県の8.2%である。

以上のことについてみると、特定の農畜産物の占める割合の高い県や地域は、その年の作柄やその価格の変動に、農業粗生産額及び生産農業所得が大きく左右される。気候や農業政策などによっても地域間の格差が非常に生じやすい。